



TITLE:

<Book Review>Herbert C. Purnell, A Colorful Colloquial, An Introduction to the Study of Spoken Northern Thai based on the Work of E. R. Hope, revised and enlarged by Herbert C. Purnell. Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1962,vii+100p

AUTHOR(S):

桂, 満希郎

---

CITATION:

桂, 満希郎. <Book Review>Herbert C. Purnell, A Colorful Colloquial, An Introduction to the Study of Spoken Northern Thai based on the Work of E. R. Hope, revised and enlarged by Herbert C. Purnell. Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1962,vii ...

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55097>

RIGHT:

高い社会的地位を占める者がどのようなものであるかを明らかにし、個人的な資質の重要性を認めつつも、いわゆる重要な地位を占めるものが、経済的に裕福な階級と結びついていることを示す。そして、互いに異なった階級に属するものが、社会生活の場でどのように分離されているかを観察する。

さらに著者は、このような構造をもつコミュニティで、政治的・経済的なあつれきがどのように表われているか、またどのように表面化せずにおさえられているかを、選挙、地主小作関係、生産物売買をめぐる商店と農家との関係などをめぐって述べる。

最後に、社会的・経済的地位の移動にふれて、個人的な能力を評価しつつも、村内においては、ある程度以上の土地をもった者が、その余力に応じてさらに所有地を拡大し、小規模の土地所有者がイスラム法による遺産相続による土地の細分化などを通じて転落の過程をたどること、また村外への移住者は、教育を受けたものを除けば、さらに低い地位へむかっての移動であることなどを明らかにする。

以上のような概要をもつこの報告書は、1)中国人の位置・役割が完全に無視されていること、2)階級・地位を分析する場合に親族関係にほとんど留意していないこと、3) Kampong Bagan とよばれるものが、実際にはある程度独立した2つの集落からなり、コミュニティとしての統一性をやや欠いていること、4)調査者自身がマレー人であるため、マラヤの事情に通じていないものには理解が困難な場合があること、などのために生ずる問題点もあり、また、調査自体も精密とはいえない難い箇所もあるが、マラヤのゴム栽培地域を理解するために、きわめて興味深い記述を豊富に持っている。(坪内良博)

Herbert C. Purnell: *A Colorful Colloquial, An Introduction to the Study of Spoken Northern Thai based on the Work of E. R. Hope, revised and enlarged by Herbert C. Purnell*. Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1962. vii + 100 p.

先に Thai Reference Grammar の項で述べたようにタイ語にかんして新しい言語学的方法論をもって書かれた本は非常にすくないのであるが、それも標準

タイ語以外の方言にかんするものとなると、さらにとばしいのである。本書はタイ国の北部方言の会話入門書とでもいうべきもので、チェンライ (Chiangrai) 県のメーチャン (Mae chan) 地区の方言をあつかっている。この書物の基礎をなすのは現代の記述言語学の方法であるが、その目的とするところは、言語の記述ということよりも、必要に応じてこの方言を使いこなすという実用的な点にある。従来のはっきりとした基礎のないあいまいなものではなく、はじめに述べられているルールさえはしっかり理解すれば、非常に便利な使いやすいものである。

一見したところ Haas の Spoken Thai に非常によく似ており、表記法も Haas のものに必要に応じて補足を加えたものである。まず最初の Introduction の項で、この方言の音素体系と本書で用いられる表記法について簡単にしかし要領よく説明を加えている。私自身このメーチャン地区でフィールド・ワークを行なったのでこの方言には興味を持っているのであるが、著者の解釈は正しいと思われる。ただ、この方言の声調の数を著者のいうように7つとするか、あるいは6つと考えるか、解釈の仕方によってちがいが出てくるのではないかと思う。本文は、全体を12の Units に分け、それぞれの Unit に Useful Words and Phrases, Hints on Pronunciation, Word Study といった Sections が設けられている。この点でも非常に Spoken Thai に似ており、まあいわば Spoken Thai の方言版だと思えばまちがいないだろう。ただ意味にかんする説明にややあいまいな点があるのはおしい。例えば、いずれも〈疑問〉を表わす /kə̀ə̀/、/kaa/、/bə̀ə̀/、/loo/ などについては、相互の意味的なちがいが、あるいは用法のちがいを、もう少しはっきりさせて欲しいのである。しかし、とにかく本書であつかわれている程度の会話を身につければ、現地に行ってもさし当って不便を感じることはないと思う。

こまかい点ではいろいろ考えねばならない点はあるにしても、例えばフィールド・ワークなどのためにこの方言が必要となった際などには、非常に役に立つ便利な本である。初めて習う者にとっても、わかりやすくできている。ただ、ことわっておかなければならないのは、ここであつかわれている方言は、チェンライ県の北部に位地する地区のそれであって、同じ北タイでもチェンマイやランパン (Lampang) など他の地域の言

葉とは多少なりともちがっているということである。

(桂 満希郎)

Herbert C. Purnell: *A Short Northern Thai-English Dictionary (Tai Yuan)*. Overseas Missionary Fellowship, Chiang-mai. 1963. vi+125 p.

本書は先に述べた *Colorful Colloquial* と対を成すもので、タイ語北部方言の小型辞書である。あつかわれている方言は、やはりメーチャン (Mae chan) 地区のそれである。語彙の数は、ざっと計算して、1900 余りである。著者が1962年から1963年にかけて現地で集めたもので、単語の数そのものは余り多くないにもかかわらず、熟語の類がかなり多く取り入れられているのは便利である。大体に、このような方言を習得する場合、本当に困難なのは音素、声調、語彙などのちがいがいよりも、むしろいろいろなイディオマティックな表現を身につけることだと思う。そういった意味で、巻末につけられた *Restricted Intensifiers* の項は非常に有益である。

バンコクのタイ語は全国の小学校で教えられており、かなりすみずみまで行きわたっているとはいえ、街から離れた村落や山地民の村などで仕事をする場合には、やはりその土地の方言でなければ仕事を進めることができない。こういった点を考えると、本書と先に述べた *Colorful Colloquial* を並用すれば、非常に効率よくこの方言を習得することができるであろう。

本文の前に、この方言の音素体系と表記法とを、チェンマイ方言および標準タイ語と対比しながら説明している。標準タイ語には5つ、チェンマイ方言には6つ、チェンライ方言には7つの声調を設定する。しかし、著者のいう High Long Fall, High Short Fall (音節末尾に閉鎖音を有する), High Short Fall (音節末尾に閉鎖音以外の子音を有する) は、相補的分布を成すから、これらをひとつにまとめて、全体としては、6つの声調を有すると解した方がより簡単に説明できるのではないかと思う。

語彙の数もまだ充分ではなく、意味にかんする説明にもややあいまいな点や取りちがえているのではないと思われる点もあるけれども、とにかくこの方言を習う際には、本書を手掛りとするのが一番よいであろう。

(桂 満希郎)

H. L. Shorto: *A Dictionary of Modern Spoken Mon*. Oxford Univ. Press, London, 1962. xvi+280 p.

われわれがその実態を十分に知ることができないような小言語についての辞書とか文法書などは、それが多少不正確なものであっても、少なくともそれ以外に利用しうるものがないという消極的な意味ではやはりそれなりの価値をもっているものである。モン語については R. Halliday: *A Mon-English Dictionary*. Bangkok, 1922. がその例であった。しかしその不完全さは別としても、この辞書は文語のそれであって、これによって現代モン語口語を知ることはいないのである。というのは、モン語では単に口語と文語の間に著しい隔たりがあるばかりでなく、文語の綴字と口語の音素形式を対応づける一定の規則すらないからである。ここにあげる Shorto 氏の辞書はまずこの点をはっきりさせて、本文をもっぱら口語の辞書とし、付録として個々の単語の綴字と音素形式との対応表を掲げている。このようにモン語の口語と文語とをはっきり区別したのは Shorto 氏が最初だと思う。

口語の辞書、とくに小言語の場合のように実用的な目的よりもむしろ言語学の専門的な目的をもった辞書においては、何よりもまず表記法の正確さが大切である。むろん完全な音素表記にこだわる必要はないわけだが、少なくともその言語の音素体系をよく反映するものでなくてはならない。本書は IPA の記号を使って、著者もことわっているように必ずしも音素表記ではないけれどもむしろそれよりも詳しい程度の音声表記がしてあるから、この点、安心して使える辞書である。著者はロンドン大学 SOAS の Lecturer であるが、ロンドン学派の音声学的技術の強さにあらためて感心させられる。

さて、本書は、まず 1949-50 にロンドンで調査したものを1950-1, 1956-7の2回にわたるビルマでの現地調査で補充・再検討した結果にもとずいていて、標準的なビルマ・モン語であるサルウィン東岸の方言を対象としている。見出し語の数は約5,000で決して多くはないけれども、その内容は実に豊富で、品詞別・意味の説明・例文・熟語とその例文・派生語と同義語など関連語彙・綴字・派生語や借用語についてその由来等々がいちいち掲げられている。相当長期間にわたる